

The Power of Music

第6回



日本抗加齢医学会評議員
日本音楽療法学会評議員

板東 浩

Hiroshi Bando



徳島大学医学部卒業、ECFMG資格を取得し米国で臨床研修。日本プライマリ・ケア連合学会理事、専門領域はアンチエイジング、糖質制限、音楽療法など。ピアニストとして国際コンクール入賞、スケート選手として国体出場あり。

日本音楽療法学会四国支部長。第9回日本音楽療法学会・学術大会長(2009)。第34回PTNA全国決勝大会Grand Muse入選(2010)、第3回ヨーロッパ国際ピアノコンクール(EIPI) in Japan 銀賞(2012)。第7回日本音楽医療研究会大会長(2014)。講演多数、印刷物は1500点以上。

<http://pianomed-mr.jp/>

はじめに

皆さん、お元気に過ごされていますか? 本シリーズで音楽の力(The Power of Music)について話題を提供させていただき、今回が6回目です。第1、2回目は音楽、第3、4回目はスポーツのリズムに触れ、5、6回目は再び音楽が有するパワーについて記しています。

筆者は内科医・ピアニスト・音楽療法士として、いろいろな機会に音楽の魅力をお伝えしてきました。このたび、第30回国民文化祭・かごしま2015が平成27年秋に行われ、その中で、聖路加国際大学名誉理事長で104歳の内科医である日野原重明先生による講演会が開催されました。

今回は、鹿児島のエピソードから音楽にまつわるお話を始めたいと存じます。

21世紀はNew Elderlyの時代

日野原先生は百寿者(センテネリアン: centenarian)の一人です。今わが国では、百寿者が6万人を突破しています。これほど長寿になった要因としては環境や経済、生活、医療の充実などが挙げられるでしょう。

先日、一流医学雑誌British medical journal Lancetから、世界188ヵ国中日本の健康寿命が1位で、自由に動けられるのは男性71.11歳、女性75.56歳と発表されました。原文によると、看護や介護なく、日常活動が妨げられる病態なく生活できる期間とあります。

平均寿命と健康寿命の差は不健康な期間となり、男性9.4年、女性11.3年と計算されます。この期間をあなたはどのように思われるでしょうか? ご家族や親戚、知り合いの高齢者を少し思い浮かべてみてほしいと思います。

これらの点に関連して、日野原重明先生が2000年秋に設立した組織が、21世紀(2001~2100)における中~高齢者の充実した人生を目指す「新老人の会」(Association of New Elderly)です。現在では、フェイスブックを用いた活動(Smart Senior Association: SSA)も続いています。

<http://www.shinrojin.com/>

鹿児島の知覧で集会

日野原先生は長年にわたって「新老人の会」の活動を続けられ、全国の支部を定期的に訪問され、講演会を開催してこられました。このたび訪れたのが、鹿児島の知覧であり、南九州市知覧文化会館でご講演されました。

知覧は日本人にとって非常に重要な場所です。歴史を振り返りますと、2015年は戦後70年にあたり、報道でもさまざまな企画がありました。わが国の高齢者の年齢を考えますと、歴史

を伝えていくことが必要となります。

知覧は太平洋戦争当時、特攻隊の方々が滞在された地であり、文化会館の右奥に隣接しているのが知覧特攻平和会館です。その入口近くに静かに佇む記念碑に、石原慎太郎氏の言葉が。「短い青春を 懸命に生き抜き 散っていった 特攻隊の若者たちが……」とあります。

私は前もっているいろいろな歴史や会館について調べておりました。しかし、本館を実際に訪れて、70有余年前、若者たちが両親にあてた手紙や多くの資料を目の当たりにすると、胸が熱くなり、文字がかすんでしまいました。

その衝撃はあまりに大きく、言葉で表現するのは難しいです。少なくとも私がお役に立てることは、知覧特攻平和会館について人々に伝えることぐらいですが、時代の流れを考えると、それほど十分な時間がないように思われます。

今わが国では国際的な状況も複雑に絡み、安保や憲法について議論がなされています。ここで、政治家や学者、経済人の立場があり、また、医師や医療関係者・芸術家・音楽家などの立場もみられます。

ただ、誰もが戦争など悲惨な状況を回避し、平和な世界を希求しているのは間違いないことです。



月光の夏

同会館に足を踏み入れますと、広いロビーには大きなディスプレイが設置され、傍らにグランドピアノがあります。このピアノから、平和を願う人々の切なる気持ちが音となって表現され発信されているかのようです。

実は「月光の夏」という広く知られた書籍があります。出撃前の最後の思い出にピアノを弾き、戦死していった若き特攻隊員の実話をもとに描かれたものです。この原作から同名の映画も作られました（神山征二郎監督、日本ヘラルド、『月光の夏』全国配給委員会、1993）。ご覧になった方もいらっしゃるでしょう。

最近のトピックスを紹介します。

この特攻悲話「月光の夏」を次世代に継承していくため、映画化に尽力した齊藤美代子さん（72）が2015年にNPO法人を立ち上げました。ちょうど戦後70年にあたり、日本の人々が齢を重ねていく状況を考えると、重要な時期です。10年後では、タイミングがあまりに遅すぎることになるでしょう。

本でも映画でも、音楽という聴覚的要素や月光という視覚的要素などが関わっているため、人の心にじっくりと働きかけるのです。もし、これらがなければ、人の心を動かし揺さぶることはやや難しいでしょう。なぜなら音楽とは、人の深層心理から表層心理まで、いずれのレベルにも直接的に働きかけるパワーを有しているからです。



月光の曲

ベートーヴェンは生涯でピアノソナタ32曲をこの世に残しました。そのバラエティに富む内容は、バッハの作品と同様に音楽のバイブルと呼ばれています。数多くのピアニストが演奏家生命を賭けてリサイタルやレコーディングに臨んできたのです。

その中で、ピアノソナタ第14番 作品27-2は「月光の曲」として誰もが知っています。ただし、「月光」という標題は作曲者自身が意図したものではありません。ベートーヴェンの死後、詩人のレルシュタープ (Ludwig Rellstab) が、第1楽章について「スイスのルツェルン湖の月光の波に揺らぐ小舟のよう」と形容したことに由来しています。

実際はどうだったのでしょうか？ 有力な説をご紹介します。ベートーヴェンが30歳のときのこと。氏の弟子でもあり恋人でもあったイタリアの伯爵令嬢ジュリエッタ・グイチャルディに捧げた作品です。当時17歳の彼女に対して、氏が苦悩したのは年齢差よりも身分の差でした。なお、ジュリエッタは以前に話題となったシントラーの伝記で「不滅の恋人」であるようです。

ほかに月光の曲にまつわる物語があります。19世紀にヨーロッパで創作され、愛好家向けの音楽新聞や雑誌に掲載されました。日本にも紹介され、尋常小学校の教材にも用いられ、下記のような誕生秘話を見聞きしたことはありませんか？

「……ベートーヴェンが月夜の街を散歩していると、ある家の中からピアノを弾く音が聞こえてきました。良く見てみると、それは盲目の少女であったのです。感動したベートーヴェンはその家を訪れ、溢れる感情に従って即興演奏を行いました。そして、自分の家に帰ったベートーヴェンはその演奏を思い出しながら、曲を書き上げた……」と。

月光の曲をアナリーゼ

医学研究は全体を小さな部分に分割して調べることが多く、分析 (analysis) と呼ばれます。語源の視点で見ますと、ana - (完全に) + lysis (ゆるめる: relax, release) です。同様に、文章の行間を読むように音の間までも読み取って解釈することがアナリーゼです。

それでは少し、月光の曲をアナリーゼしてみましょう。ソナタ No.14はベートーヴェン自身が「幻想曲風」というタイトルを付けています。表題に Fantasia とあり、演奏は遅くゆったり (Adagio) と、音の長さを十分保って (sostenuto) と指示されているのです。

第1楽章が緩徐楽章で、異例の構成となっています。右手は

ゆっくりとした分散和音で、左手のベースの音が全体を包み込んでいます。湖の底からベースとなる音が発せられ (○)、水面は静かに、月光の波に揺らいでいるようです。旋律 (○) は浮かんでいる小舟を表しており、少しだけ動いていますね。

そして2、3楽章と進む毎にテンポが速くなり、序勢急的な展開となります。他のソナタでは見られない、大きな特徴と言えるでしょう。

第3楽章の演奏は速く (Presto) 激情的に (agitato) と。右手の旋律は第一楽章の動機から同じ和音を急速に展開。上昇する激しい分散和音の頂点で、予期しない強烈なアクセント (*sf*) が (○)。左手バスの音は順次下降し (○)、技術的にも難曲の一つとして長年知られてきました。

SONATE SONATA QUASI UNA FANTASIA Der Gräfin Giulietta Guicciardi gewidmet Komponiert 1801

第1楽章

14. Adagio sostenuto Opus 27 Nr. 2
Si deve suonare tutto questo pezzo delicatissimamente e senza sordino*)
sempre *pp* e senza sordino

第3楽章

Presto agitato

ベートーヴェンは第1楽章で幻想的なムードを醸し出しました。引き続き2楽章でやや明るい長調で気分を変え、3楽章で鍵盤を強く叩きフォルテ (f) で演奏し、心の激情を表現したのではないのでしょうか？

更に、その背景について推測してみます。当時、音楽家は崇高な芸術を極める人間でありました。しかし、社会的には地位が低く、いろいろな対人関係や貴族との関わりなどで鬱積した感情があったものと推測されます。バッハの時代のように音楽は神のためではなく、人間のためのものであると、その後彼は社会に発信していくのです。

ちなみに、月光の曲に関わる作品としては、「月光の夏」に加えて「名探偵コナン」(「ピアノソナタ『月光』殺人事件」)や「ALIVE」(X JAPAN)、「るろうに剣心」(明治剣客浪譚漫)なども挙げられます。

🎵 月光に関わるいろいろな曲

クラシックの世界では、各ジャンルで代表的な作曲家が知られています。バロックはバッハとヘンデル、古典派ではモーツァルトとベートーヴェン、ロマン派と言えば双璧のショパンとリスト、その後、印象派としてドビュッシーが登場しました。彼は音楽大学でも超優等生であり、従来の音楽の理論や実践をすべてマスターしたのです。そして、更に、印象派という新しい音楽の世界を創り出した天才と言えます。

かつて私が初めて彼の音楽に触れたとき、全く驚いてしまいました。楽譜を見ると、あまり音符がなくて簡単な曲に見えます。しかし弾いてみると、異次元の世界が広がるのです。

それはなぜなのでしょう？ 従来使われてきた和音はピアノの鍵盤でド、ミ、ソ、シ、レと一つおきに音を重ねるのが基本でした

(三度)。しかし、ドビュッシーはドとレ、ファとソのように、隣り合った音を同時によく使うのが特徴です(二度)。これらの斬新な音の組み合わせで、何とも不可思議で独自の新しい音の響きの世界を、創造したと言えます。

それでは具体例を示しましょう。最も有名な曲がドビュッシーの「月の光」(Debussy: Claire de Lune)です。楽譜を見ると、通常の三度ではなく二度の和音を多用しているのがわかります(○)。ポール・ヴェルレーヌの詩集「艶なる宴」(Fêtes galantes)に収録されている詩「月の光」に触発されたものです。このように、印象派とは文学や絵画、音楽など芸術すべてを包含する感性とパワーを有しているのです。

月の光は数多くの機会に用いられています。ディズニー映画「ファンタジア」や富田勲氏によるシンセサイザーの編曲、NHK「みんなのうた」版(歌唱曲用の編曲)、「ドラえもん」の「青い月夜のリサイタル」などでも使われました。すなわち、私たちはあまり意識しなくても、月の光をいろいろな編曲で聴き、深層心理のレベルに記憶しているものと思われます。

🎵 おわりに

今回は日本人にとって重要な知覧で「月光の夏」に出会い、月(luna)の光について触れました。ポピュラーでもグレン・ミラーのムーンライト・セレナーデが有名です。

太古の昔から、満月の夜には人が狼や狂人(lunatic)に変容するとの話が。光の振動が耳の奥にある蝸牛管の有毛細胞や心の琴線を共振させ、幻聴や幻覚をきたすのかもしれない。一度、あなたも月や星から光や音を受け止め、メッセージを心で感じてみませんか？

ドビュッシーの「月の光」
(Debussy: Claire de Lune)